

# 日本人はなぜ、どのようにならざるを得なかったか

早稲田大学名誉教授 河原 宏

## 自己滅却的？

——経済成長の動因

見渡す限りの焼け跡と廃墟。終戦直後、日本のほとんどの大・中都市の光景だった。人々の衣食住も、この光景に見合っただけに乏しいものだった。戦後の日本人はここから働き始めた。文字通り死にもの狂いで。こうして復興から経済成長、やがては経済大国となり、ついには「ジャパン アズ ナンバーワン」と唱われる段階にまで到達した。

ハーヴァード大学の心理学教授デビッド・C・マックレランドは多くの論著で「どのような推進力が経済成長と近代化をもたらすか」を探究している。彼は個人をエネルギー「行動させる思考法を「成就への欲求」(n-Ach, "need for achievement")と呼び、それが強ければ強いほどその国民の目的はめざましく達成されると説いた。これは成就であり、達成であり、獲得である。個人としては自我の拡大となる(1)。

ところで私には彼の理論がいかにか手ぎわよく経済成長の動因を説明しているとしても、尚、欧米的な発想であった、戦後日本にとってはある見えない一点をとり逃がしているように思える。

彼は見えるものしか見ていない。では見えないものとは何か？

瓦礫や灰塵に埋めつくされた廃墟に、残された見えないものは死者の魂と生者の傷心である。それらは統計にも記録にも現れない。だがこの焼け跡からあの壮烈な働き方を始めたのは誰だったのか。彼らの多くは苛烈な戦争をくぐり抜けてきた人たちだった。戦場には死んだ戦友を残し、帰国すれば家族は四散、尋ねる友人・知人も既にない。彼らは心中にただ無限の悲しみと鎮魂の情を抱きながら、働くこと、我を忘れて働くことだけが救いだった。それは何事かを成就しようという欲求



ではない。外からみれば憑依とも見えただであろう。だが彼らには見えないものが見えた。だから自己滅却的に働いた。結果、これが戦後日本の経済成長を達成した(2)。

彼らは本当の内面を語らなかつた。語れない。語ろうともしない。深い沈黙の中を傷心だけが旋回し、身を粉にして働く時だけその痛みを忘れることができた。勿論、外国人には理解できない。だから彼らはこの行動に一種不気味さの念を込めて「鬼小屋に住んだ働き蟻」とか「エコノミック・アニマル」という言葉を投げかけていた。

## 合理主義の帰結

——原理主義とニヒリズム

変化は経済成長の中から来た。経済成長が合理主義を育てた。多分、欧米では逆であろう。近代の初め、合理主義は「神」に逆らって成長した。しかし今のように経済を第一義にすれば、当然「神」ではなく「金」が万物の主宰者となる。神がなければ、悲しみも鎮魂もありえない。ドイツの精神分析学者ミッチャーリッヒ夫妻は著書『喪われた悲哀』でユダヤ人を含む膨大な戦争犠牲者を前に、悲しまない、悲しむことのできない人たちが西ドイツの経済的繁栄を達成したと論じている(3)。もともと人間と世界には無数の由緒・

因縁・故事・来歴がからまっている。

これらは合理的に説明できないもの、だから合理主義はそれらを除去する不都合の合理化によって実現する。徹底しない合理主義は存在しない。いささかでも不合理を残した場合は非合理主義に過ぎない。あらゆる愛着や人情も切り捨て、不合理だからである。こうして妨げるもの、遮るもののない経済成長が実現した。その代わりいつの日か経済が破綻した時、一切の救いもない。これは個人的にはワーカホリックと言えるかもしれないが、それが合理的に構成されていけば中毒でも奴隷でもない。まさに「戦士」として最強の働き手となる。戦後日本で働く者はしばしば企業戦士と呼ばれていた。

では合理主義が徹底するとどうなるのか？—具体的には経済大国が実現した時、原理主義とニヒリズムに分裂する。しかしこの両者は正反対ながら共に合理主義の正統な子息、異母兄弟である。現代の徹底した合理主義はコンピュータとして具体化され、0と1の組み合わせで人間・世界・宇宙を説明するが、ニヒリズムと原理主義はそれに相当して現代文明を構成する二大要素である。

この両者を異母兄弟だとすると、それぞれの母は誰か。原理主義は本来一



「ネフ」に始まる。やがてドストエフスキ―やニーチエを通じて世界に広まったから日本人も外来語だと思っただけで、その原初形態はむしろ日本に備わっていた。なぜならニヒリズムとは本来無神論のことだが、無神論は多神の風土から生まれるものだからである。八百万の神々を奉ず

神教から発生する。例えばキリスト教は唯一神を奉ずる一神教である。しかし宗教改革が起こった一六世紀までに、カソリック教会はマリア信仰や聖人信仰を取り入れかなり多神的になっていた。さらに教会は「免罪符」の発売で神の赦しを金で買えるものとしていた。マルチン・ルターは教義を「信仰による義とせらる」の一点に絞り、本来の一神の性格を純化しようとした。これが新教・プロテスタントであり、その主張はかなり原理主義的。ルターに反対したカルヴィン派やアナバプティストはさらに原理主義的で、以後、新教と旧教、新教内の宗教対立は一七世紀半ばまでおよそ一世紀半続く。

これを昔噺と言っただけならいらない。世界的規模では、イスラム原理主義の台頭が現代文明の根幹を脅かしている。日本については、前述のように金を神にした「金」原理主義が戦後社会を揺さぶり続けている。

他方、ニヒリズムはどうか。この言葉自体は一九世紀ロシアの作家ツルゲ

る日本の神道は多神教の典型。一方「人も空にして法また空」を説く大乘仏教の究極は無神論。この結合によって、ヨーロッパでは知的エリートのものであったニヒリズムが日本ではむしろ大衆的な広がりを持っていた。

それにしても一神教の悲しさは、異端・背教の徒を続々と作って延々と宗教戦争をするが、到底無神の境地に到達できない点にある。ところが狐も神なら蛇も神、鯛の頭も信心からという多神の風土では、この小さな神々を否定してゆく合理化の過程で容易に無神の世界に参入する。日本人は神も仏も無い世界にわりと平気である。学ばず働かず、そのためのトレーニングも無いというニートは、世間が認める諸々の価値、即ち学校とか仕事・訓練などの神々を否認している現代の無神教徒の典型なのかもしれない。

### ニートとヒルズ族

水平線も短ければ直線である。今、この複雑な世相を把握するため一本の

横軸を引いてそこにさまざまな人間形態を配列してみる。一方の端には働かないニート、一般的には負け組みの典型とされる。他方には堀江・村上ら極めて効率的に金を稼ぐ者の象徴ヒルズ族、勝ち組みの代表。彼らは稼ぐが勝ちと揚言し、金を稼いでなにが悪いと開き直っていた。この中間にはさまざまな働く人の類型が配置される。

一つの疑問と問題―巨万の富を誇る彼らヒルズ族は働いていると言えるか？

多分、このような富と縁のない者は言う、まともには働いて稼げる筈はない。しかし世界は広い。世界的富豪の水準からすれば、日本の金持ちは懸命に働いてもせいぜいあの程度のものか。この違いは、それぞれの人が働くことに込める思念の違いに由来する。

ところが水平線も大きくは弧、犬吠岬の先端に立つて見れば分かる。現代をやや大きな歴史的視野で見れば、ニートとヒルズ族は反対方向から実は繋がってしまう。彼らは共にポスト・パブル期の申し子として、ミチャリッヒがいうように心から悲しむことが出来ない。悲しむことが出来なければ、心から楽しむこともできない。人を信ずることもできない。神がないとはこの意味である。

では現代にとってより大きな問題は何か？ 今の日本人のホンネは、この両者にある種のうらやましさを隠せないであろう。世間的には言えないが、もし自分も働かず好きにすることだけをして暮らしてゆけるなら、そうなりたいたいという気持ちは否定できないだろう。ヒルズ族についてはいうまでもない。仮に自分が金を生むよう

な運命が恵まれたら誰がそれを拒否するだろうか。

かりそめにも働く人がこのような幻想に捕らわれるとすれば、その理由は現実の生活や仕事之余にも厳しいからである。私は近著を石川啄木の歌集『一握の砂』(一九一〇)から二つの歌を引くことで始めた(4)。

「はたらけど はたらけど猶わがぐらし 楽にならざりぢつと手を見る」  
「こころよく我にはたらく仕事あれそれを仕遂げて死なむと思ふ」

実に百年近く前の歌ながら、前者は多くの人にとって今も変わらぬ実感。働くことの悲しみの歌。後者は望みうる最高の働く喜び。しかし容易には達成されない願望。だからわれわれはこの現実と願望の狭間で、ニートの・ヒルズ族的なもの双方に惹かれてしまう。その上、働かないニートにただ働けというのは、彼らを「ぢつと手を見る」境遇に入れというに等しい。後の歌は教育の場では容認されない。つまりこの二つの歌は、われわれの閉塞感と未来への展望のなさの中のみ共存している。

### 合理主義を超えて

創造的想像の勧め

それにしても、人間はいつまでもこのような閉塞感の中に止まることにはできない。現に今、自殺者は急増している。生き甲斐・働き甲斐が見いだし難いからで、近代文明を支えた合理主義も変わらざるをえない。生き甲斐は合理的に分析できないからである。ある



ネット自殺者が言い遺していた―「死にたいのではない。生きたくないだけだ」。

これを個人的な症例とみなせば、別に社会問題とはならない。「自殺対策基本法」もその前提に立っている。しかしこの心、どこかニートの気分と似てはいないか―「働きたくないのではない。生きたくないだけだ」に。だから閉じこもるのである。もしそうなら、ニートも自殺者もより広範な現代文明の特性に根ざしていることになる。

問題をニートに絞ろう。働かない者の典型として。働かないことが、かえって人間にとっての働くことの意味を鮮明にする。ヒルズ族などは所詮一時の仇花。放っておいても「奢れる者久しからず」の言葉通りすぐに自壊して、別の勝ち組と交替している。現代文明にとつては、おそらく終わることのないニート問題の方がよほど重大である。

以前、ある政治家がニートのような若者が出るのは教育界の責任だと述べた。私も違った意味でニート、あるいはニートの教育事情にあると思っている。特に地獄とか戦争とまで言われ、友人もすべてライバルの受験競争。しかもその成否が人の一生を左右すると思われる。それを中心に組み立てられた現在の教育事情。これがどれだけ子供や若者から楽しく学び、飲んで働く意欲を奪っていることか。

まずは受験戦争をなくし、大学に入り易く出がたいものにしてみたらよい。方法はある。それが果たされれば、効果は自動的に小・中学校の段階にまで下つてゆくだろう。ただこれは啄木と同じ単なる夢想。教育界の既得権を傷つけることは出来ない。結局、そこから生まれる閉塞感がまたもや若者の心を閉じたものにする。

もっとも学び・働く喜び、つまり人の生き甲斐の問題解決を外に求めるのは見当違いであろう。型に嵌った説教や教訓もムダ、子供は話の中身より話し手の姿勢や熱意に反応する。親や教師・上司や先輩は、あるべき学び方・働き方、を子供や若者に日常の行動で示す以外にない。イソップの寓話「太陽と北風」でいえば、年長者は「太陽」になることが求められる。その覚悟と準備がない限り、ニートの若者は増え続けるだろう。

もはや紙幅も尽きたので、後は要点を箇条書きでまとめよう。

(一) 人の生活は学び・働き・遊ぶの三つから成っている。われわれはこの三つが融合する場と機会を、個別の実情に即して見いだす努力を払った方がよい。

(二) 人間は飲みも悲しみも他者と「共に」したいと望んでいる。現にあのサッカーWカップでの熱狂ぶりを見ても、いかに人々が「共に」飲むチャンスに飢えているかが分かる。だが本当の喜びは共に学び、共に働く共歓の中にある。家庭では親と子が、学校では教師と生徒が共に学べる形、職場では上司と部下が共に働ける方法を作り出す。勿論これは日常の教育や仕事とは別の場においてである。私はそのモデルを一九世紀のドイツから始まった「シュレパー農園」(一種の市民農園)に求めた。これを参考に、今必要なのはそれぞれの家庭・学校・職場の実情に合わせた創意と工夫である⑤。

(三) こうして「共に」のモティーフは、人が自然と共に働くという上記「農園」の発想に導びかれる。これは、狭

くはニートやニートの生き方を解消するのに役立つだろう。広くはやがて人々が共に飲べる社会を造り出すかもしれない。出口なしとも思える今の閉塞感を突破するには、現実を超えた創造的想像の助けを借りなければならない。

〔注〕

1. D.C.McClelland「The Achieving Society」1961年。その他。
2. 河原宏「鎮魂と怨念の戦後精神史」、『漂白する現代人』一九七四、学陽書房所収。
3. A.&M.Mitscherich, "Unrauhigkeit zu Trauern", 1967. 邦訳「畏われた悲哀」, 1972, 河出書房新社。なおここでは、フロイトの理論に基づき「悲しみ」には二つ、自己喪失に陥るものと、それを克服して自己充実に至るものがあることを指摘している。
4. 河原宏「日本人はなんのために働いてきたのか」、二〇〇六、ユビキタ・スタジオ。
5. 同右、およびより詳細には「素朴への回帰」、二〇〇〇、人文書院。

かわはら・ひろし／一九二八年生まれ。政治学博士。専攻は日本政治思想史。早稲田大学名誉教授。主著は『昭和政治思想研究』(早稲田大学出版部)、『自在』に生きた日本人(農文協)、『青年の条件―歴史の中の父と子』、『科学文明の「信」を問う―存在・時間・生命の情理』、『空海 民衆と共に―信仰と労働・技術』(以上、人文書院)、『日本人はなんのために働いてきたのか』(ユビキタ・スタジオ) など。